

静岡 沖縄を語る会

第59号

2023年9月13日
静岡県静岡市清水区
西久保300の12

富田英司
ゆうちょ口座
静岡・沖縄を語る会
00890-1-152770

「最も最悪な判決」
「最高裁の役割を投げ
捨てた蛮行」
「敗訴に負けるな！」
「海を壊すな！」



▶ 東富士演習場監視活動: 155ミリ榴弾砲、白リン弾が撃たれている（7月24日）



▶ 大浦湾でカヌー、船舶で海上行動。「軟弱地盤は、命の宝庫だ。」

▶ 航空自衛隊静浜基地（焼津）に
予防着陸（？）した陸上自衛隊オ
スプレイ。ギアボックスに金属片。

民間外交・自治体外交で「平和な国際社会」を —日本政府・大手メディアのキャンペーンに抗し、“戦わない覚悟”を

渡辺 幸重(静岡・沖縄を語る会会員)

麻生太郎元首相（自民党副総裁）が台湾で「戦う覚悟」を強調したことが大きな話題になりました。メディアによってニュアンスが異なりますが、台湾で戦争を起こさせないためには「日本や台湾、アメリカなどが協調」して「いざとなったら防衛力を使うという明確な意思を相手に伝える」ことで「非常に強い抑止力」を機能させるのだそうです。戦争を抑止するための「戦う覚悟」とはどういうものなのでしょうか。

8月6日の広島原爆の日に松井一實・広島市長は「世界中の指導者は、核抑止論は破綻しているということを直視」することを呼びかけ、核抑止論からの脱却を促しました。また、8月9日の長崎原爆の日でも鈴木史朗・長崎市長は「核抑止に依存していくは、核兵器のない世界を実現することはできない」と訴えました。核兵器を頂点とする軍事力で戦争を抑止することはできないことは明らかです。

にもかかわらず岸田・自公連立政権は軍事力増強路線を突っ走っています。麻生発言はその日本政府の意向を背景に“暴言”をよそおって日本国民に「戦う覚悟」を迫っているのです。しかし、台湾有事に参戦することは、台湾を中国の領土の一部と見なし、「すべての紛争を平和的手段により解決する」とした日中共同声明・平和条約に違反します。もちろん明白な日本国憲法違反です。

TBS『サンデーモーニング』でジャーナリストの青木理さんが「かつては内閣が吹っ飛んだようなことが平気でまかり通っている」という意味の発言をしていました。安倍政権以降そのようなことがいくつもありました。それを許してきた日本国民はどうしてしまったのでしょうか。私たちは日本政府や大手メディアの反中意識を煽るキャンペーンに流されず、国内に冷静な議論を作ると同時に民間や自治体レベルでの平和外交を模索し、海外との交流や対話を続ける必要があるのでないでしょうか。



平和外交と対話によって相互の信頼関係を築く玉城知事の訪中



沖縄県は以前から米軍基地問題を広く国内外に知ってもらうための活動を展開しています。アメリカの政府や議会、有識者とも交流し、ロビー活動や情報収集を行ってきました。それは日本政府が沖縄の声を理解せず、アメリカ政府にその主張を伝えないばかりか逆に率先してアメリカの世界戦略に沿った政策を

今年の4月29日、那覇市で「『台湾有事』を起こさせない・沖縄対話プロジェクト」の第二回シンポジウムが開かれました。台湾の与野党系の研究者、沖縄県の保守・革新双方の立場の論者による対話を行った第一回シンポジウムに続いて、第二回目の対話セッションでは台湾で漁民や労働者の支援活動をしている人や石垣島で住民投票活動をしている人、沖縄出身の自治体外交の研究者らが「地域の



対話で戦争を起こさせない」という立場から議論しました。9月9日には「大陸（中国）との対話 率直に聞こう！率直に語り合おう！」をテーマに第三回目のシンポジウムが行われます。

また、6月24日には那覇市でシンポジウム「沖縄を平和のハブとする東アジア対話交流プロジェクト」が開かれました。第1部「沖縄平和ハブ構築に向けて～安全保障、文化、経済、外交交流の拠点化を考える～」第2部「経済トーク 福建・台湾・沖縄」第3部「次世代トーク」というプログラムを見ればこのイベントの狙いがわかります。

辺野古では米軍の退役軍人や海外の環境保護団体なども関わり、国際的な広がりが見られますが、琉球弧の軍事要塞化が進み、「台湾有事」が喧伝される中で台湾や中国の人たちとの対話や交流によって平和を目指す動きが高まっています。

台湾有事があっても日本の米軍基地を使わせず、台湾・中国に自制を求める外交を

新外交イニシアティブは2022年11月、政
策提言「戦争を回避せよ」を公表しました。
それによると、台湾有事を回避するためには
展望を持った外交展開が必要とした上で、
・アメリカに対しては、事前協議において米
軍の日本からの直接出撃に必ずしも「YES」
ではないことを伝える
・台湾に対しては、過度な分離独立の姿勢を
とらないよう説得する
・中国に対しては、台湾への安易な武力行使
は国際的な反発を招くこと、軍事面では日本
は米国を支援せざるを得ない立場にあるが
台湾の一方的な独立の動きは支持しないこ

とを明確に示すことで自制を求める
などを例示し、「政治は、最後まで外交を諦め
てはならない」と強調しています。

あるシミュレーションによると、台湾有事
が起きてアメリカが参戦した場合、アメリカ
が中国を抑えるためには日本の米軍基地の使
用が必須となっています。日本政府がアメリ
カ追随ではなく毅然として「戦争反対」を貫
いて事前協議で米軍基地使用を拒否し、中国
と台湾に自制を求めれば道は開けてきます。
日本政府にそれを求めるのは一人ひとりの日
本国民です。それが平和外交を支えることにな
ります。

あらゆる手段を駆使して、戦争をさせない世論を広げよう

今年の8月18日、アメリカのキャンプ・デ
ービッドで日米韓の首脳会談が開かれ、3カ
国が連携して北朝鮮のミサイルの脅威に対抗
する弾道ミサイル防衛協力の拡大、日米韓の

共同軍事演習の実施、北朝鮮の不法なサイバ
ー活動に対抗する取り組みなどを行うことに
同意しました。これに反発した北朝鮮は海軍
に核兵器を配備する意志を示したとされます。

「核抑止力」を強化しようというのです。軍事力で戦争を抑止しようとすると軍拡競争が起き、核兵器レベルまで達することを示しています。

ロシアのプーチン大統領がウクライナ戦争で核兵器の使用をちらつかせているように、核抑止論はすでに破綻しています。これは広島・長崎の両市長が指摘した通りですが、日本政府はアメリカと核兵器を共有する「拡大抑止論」まで主張するようになりました。私たちは日本政府の軍拡路線を止め、隣国はもちろんのこと世界各国と仲良くしなければなりません。

新外交イニシアティブの猿田弁護士は「戦争を回避するための外交努力が尽くされていないことが問題」と指摘しています。日本政府はアメリカの属国かと思われるぐらいアメリカのいうことを聞いていますが、東南アジアの国々は、米中の間でうまくバランスをとる外交努力を続けています。たとえばアメリカの同盟国・フィリピンでさえ、米国が台湾防衛のための作戦に使用する武器を米軍基地

に備蓄することを認めず、米軍がこれらの基地で給油、修理、再装填することを認めないと外務長官が明らかにしています。

猿田弁護士は「今こそ、国際協調による平和を謳った日本国憲法の精神を活かすべき時。SNSでつぶやく、国会議員にファックスを送るなど、できることはたくさんあります。あらゆる手段を駆使して、戦争をさせない世論を広げましょう」と呼びかけています。

私たち民間の草の根外交は海外に出かけなくても、留学生・旅行者との交流や住んでいる自治体への要求など国内外のさまざまな場面で可能です。どのような輸入品を買うかという日常の行動にも意識が現れるでしょう。さらにインターネットを利用すれば署名活動や意見交換など活動が広がります。日本政府や大メディア、ネット右翼などのヘイトキャンペーン・脅威キャンペーンに負けることなく、声を上げ続けたいと思います。

『沖縄を再び戦場にさせない県民の会』 設立・キックオフ集会

9/24(日) 12:30~16:00

開場12時
入場無料

開催場所：沖縄市民会館 大ホール（沖縄県沖縄市八重島1丁目1-1）

スケジュール

- 12:00 開場・受付
- 12:30 開会式・音楽コンサート
（沖縄手嶌きよし、山城博治、アーバンマーチ等）
- 13:00 共同代表 具志堅隆松
（沖縄県第一連合会議員会議長）
- 14:00 キックオフ集合
- 16:00 終了

来賓挨拶

第32東司令部隊の
保存・公開を求める会
瀬名波榮喜会長



沖縄を再び戦場にさせない県民の会
共同代表 具志堅隆松



沖縄を再び戦場にさせない県民の会
共同代表 瑞慶観長皓



呼びかけ団体・個人のみなさん 8月24日現在 沖縄県

ノーアルバム戦争をさせない会、平和市民連絡会、沖縄環境ネットワーク、沖縄川流域保護事業、沖縄ガム連絡会、沖縄財團法人大連合会、沖縄県議会議員有志会、ミサイル防備から始めるうるま市民会、沖縄財團プロジェクト、第42回真手嶌きよし連盟議員会議長、第3回吉田昭義連盟から原田となくす副会長、やんばるシヌマ・いーなぐ会、基地、実業を許さない行動する会たちの会、ミサイル基地いらぐら吉古谷島の民連絡会、嘉手納ビースアクション、辻野村好子が率いる中島の会、宮古平和ネットワーク（3会員）、沖縄県高等学校連盟沖縄県教員会、OBP アイヌ民族議論、沖縄平和サポート、第32回奈良都連の保存・公開を求める会、沖縄市立平和ガイドネットワーク、沖縄歴史保存会、ボランティア「ガママツ」、沖縄県環境政策委員会、東アジア人権研究会研究会、沖縄研究会、東アジア共同研究会所、沖縄センター、Young Friends of Okinawa (YouGO)、FTA反対から市町を守る会、民子ども育成会、沖縄県連絡会、曲を弾むチャイニーズ・ピアノ・ビッグ（VIP）、ZENICOおきなわ、あらゆる基地の建設、強化に反対するネットワーク（宜野湾ネット）、沖縄県、県民保健研究会、高森真美、高麗、国際保育（ミサン）連携に反対する市民の会、高城秋乃さんのみ裁判を支援する会「ガママツ」を支援する会、アイヌ民族と連携するタルマの会、日本山形連絡会、伊江島わいわいの里、鹿児島リーチーム、鹿児島平和ネット、基陽のない沖縄をめざす市民の会、沖縄親子若ビーストウォーキング実行委員会、沖縄県教育研究会、与那国島の明るい未来をめざすライバの会、自動車の停車場等建設に反対する沖縄市民の会、沖縄YWCA（石垣）、島を戦場にさせない県民の会、「へりパッドいらない」任民の会、いのちと暮らしを守るオハーハたちの会、石垣・内原連絡会、与那国・波照間、相馬千代基、高橋千恵、中井真理、上野典子、慈ぐるみ連絡会のわん、慈ぐるみ在連、南風原、うさま市連ぐるみ連盟、本那島ぐるみ連盟

引き続き多くの団体・個人の参加を呼びかけています。



開催日決定 沖縄を再び戦場にさせない！

11/23(木) 県民大集会

奥武山公園にて開催予定

全県・全国からのご参加をお待ちしています。

お問い合わせ hiro.yemehiro1952@gmail.com (山城博治)

「静岡でもPFAS(有機フッ素化合物)汚染問題起こる」

富田英司（静岡・沖縄を語る会共同代表）

会報「第58号」でも知り上げた

PFASによる汚染問題。

前号の会報で「ほってはおけない汚染問題！全国に拡大！」と書き、沖縄だけでなく東京・横田基地周辺の多摩地区や横浜の横須賀米軍基地でも、人体に有害なPFAS（有機フッ素化合物）が起こっている事を指摘してきた。

ところが私たちの地元・静岡でも次々にこのPFASの汚染問題が起こっている事を報告する。

清水市（現静岡市清水区）での

PFASの汚染問題を解明する

私が住む清水でもこのPFASの汚染問題が起こっている事を初めて知ったのは、アメリカのジョン・ミッチエルさんが中心になって書いた本「永遠の化学物質。水のPFAS汚染」（岩波ブックレット）を読んでからである。

第2章に「デュポンは、清水市（現静岡市清水区）にある工場でもPFOAを使用したテフロンを製造していた。1965年開業の三井フルオロケミカルズ株式会社が操業した工場だ。1981年9月、デュポン米国本社は清水工場に対して、PFOAが米国の労働者の血液中で蓄積しており、曝露したラットの出生障害と関連づけられていることを報告する書簡を送った。そして曝露の確認のため清水工場に労働者の血液検査を要求した。初期のこの調査は公表されなかったが、次章で見るよう、数年後の清水工場の検査で労働者や、そして環境にも、顕著なPFOA汚染が発覚することになる。」

そして第3章には「アメリカのパーカーズバーグにあるデュポンのテフロン工場では、地下水と労働者の血液中におけるPFASの蓄積をモニターしてきた。日本でも、静岡市清水区の工場地帯でも同じような調査を実施してきた。2002年の内部電子メールによれば、1

0カ所の地下水がPFOA汚染されており、最も高濃度の地点で154万ppmが流出排水から検出されている。（米国メディアのインタビューに対して、同社の広報担当者は工場周辺の水は飲料水ではないと語った。）デュポンがEPAに提出した文書から、清水工場の労働者が深刻な影響を受けていたことが判明した。2010年、製造部門の被用者を検査したところ、血清中のPFOA値の平均は247万4000ppmという驚愕の数値だった。清水で直接PFOAを取り扱わない労働者さえ、平均して85万5000ppmの値で汚染されていた。清水で検出されたのはパーカーズバーグ工場の労働者たちから検出された35万ppmの、2倍以上の数値であった。」と、なまなましい汚染の実態が報告されている。

この本を読んでから清水の三保地区に行き、現在も「三井・デュポンケミカル」と「三井・ケマーズフロロプロダクツ清水工場」があることを確認した。

これらの工場でのPFAS汚染問題はどのようなものだったのか？かなり昔の話にもなるので地元の皆さんの協力をえて調べている。

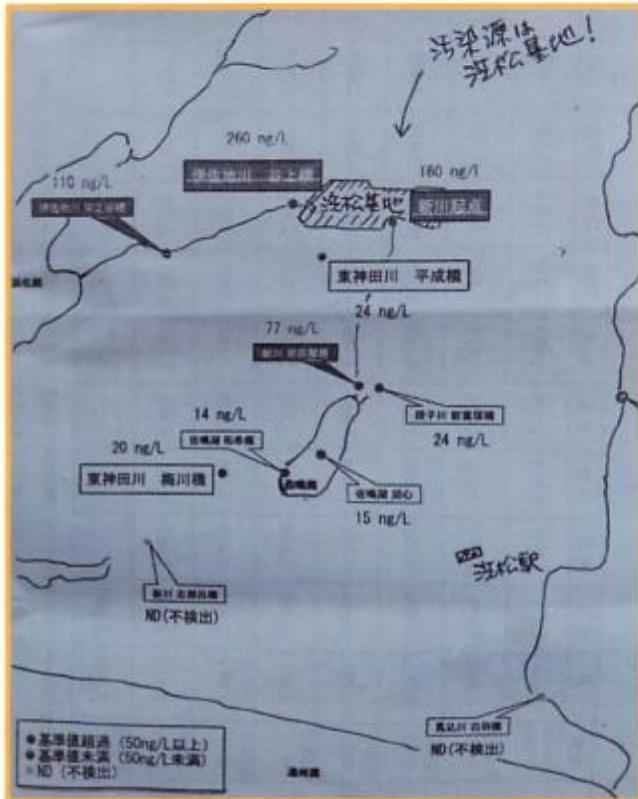
航空自衛隊浜松基地周辺で

PFAS汚染発覚

二つ目の報告は、発がん性の疑いがあるPFAS（有機フッ素化合物）が、浜松市の航空自衛隊浜松基地近くの河川から国の暫定指針値を超えて検出された問題。

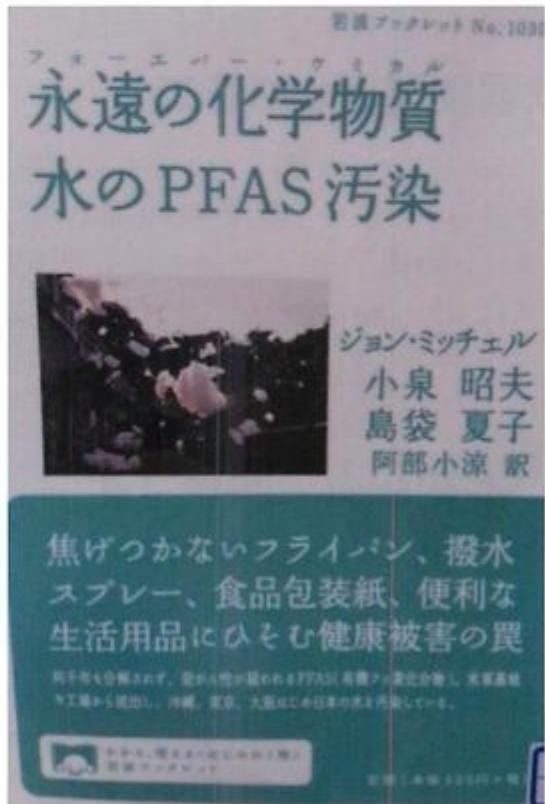
浜松市は今年5月と6月に調査した河川や地下水から、指針値の最大28倍のPFASが検出されたと発表した。航空自衛隊浜松基地近くの北部承水路から1リットル当たり280ナノグラム、その支流から1400ナノグラムが検出され、それぞれ暫定指針値（50ナノグラム）の5.6倍、28倍だった。

4月に実施した調査では市内を流れる伊佐地川や新川で指針値を超えたことから、5、6月に上流の水路や周辺の川で追加調査をした。北部承水路とその支流で指針値を大幅に上回って検出されたのは浜松基地から100メートルほどの地点。伊佐地川と合流し、前回調査で指針値の5倍強のPFAが検出された谷上橋を経て、浜名湖に流入する。(詳しくは「地



図「PFOS及びPFOA測定地点」を参照)

住民からは「早く原因を突き止めて対策してほしい」「伊佐地川はこれまでも値が高かったが、今回はそれを上回るなんて」「川の水は浜名湖に流れている。魚や貝などは口に入るものに影響は出ないだろうか」「どのくらいのPFAが流れ出しているのか不安だ」等々の声が上がっている。



何とも危ういオスプレイの飛行訓練を続けさせる日本

飛行 800 時間で部品が劣化 7月29日の東京新聞は、昨年6月のオスプレイの墜落事故の調査報告書について、クラッチ不具合トラブルにより同様の事故が過去15件起きていたと報じています。オスプレイには両側にあるエンジンの片方にトラブルがあった場合も、もう片方のエンジンだけで両側のプロペラを回せるシステムがあるというのですが、このためにクラッチが一時的に離れるというのです。この傾向は飛行時間800時間を超えた機体で起きる傾向があるのですが、根本的な原因是不明なのです。米軍は「部品交換で99%は解決」としているようですが、何とも頼りないものです。

飛行停止を求める防衛大臣 こんなことがあるとすぐに明らかになるのが我が国政府の「国民無視」の姿勢です。昨年6月の事故によって米空軍が8月に飛行を停止しました。オスプレイを配備した陸上自衛隊も追随しましたが、米軍が根本原因の究明を先送りして飛行を再開すると、陸自も飛行を再開したのです。そしてこの報告書にも追随。8月27日オーストラリアでオスプレイがまた墜落し、3人が死亡しています。また、8月31日には焼津の静浜基地に陸上自衛隊木更津駐屯地所属のオスプレイが「予防着陸(意味が分かりません)」しています。(望)

工事費底なし 予算半分使い切っても14%なのに 辺野古裁判沖縄県敗訴のデータラメ

9月4日最高裁判所は辺野古新基地の軟弱地盤対策に関する訴訟で、政府の設計変更を承認しなかった沖縄県を敗訴させました。明石市の泉前市長は翌5日X(元ツイッター)で、「『裁判』といつても、これは『政治』そのもの。最高裁の裁判官を決めるのは、ときの政権。政権が許容できる範囲の裁判官しか今は選ばれていない。政権が許容できない判決が出ることはなく、結局は『政治』だ・・・」とつづっています。

軟弱地盤隠して着工

辺野古の軟弱地盤についてはN値0「マヨネーズ並み」という言葉は何度も聞いていると思います。水面下90メートルにも及ぶ事実を防衛省は2015年につかんでいたのに、隠ぺいして2018年12月に埋め立てを開始。軟弱地盤を認めたのはその翌月でした。

いくらかかるか回答せず

当初見積もった総工費は3500億円です。2022年度末時点で4000億円以上が投入されているにもかかわらず、埋め立ては1割台です。

当然大幅な設計変更が必要であり、防衛省は軟弱地盤対策として総工費を9300億円に引き上げていますが、本当に完成を目指すとすれば2兆円から3兆円と言われています。

今年6月の参議院外交防衛委員会で「いくらかかるのか」のとに浜田防衛大臣は「引き続き抑制に努めつつ、必要な経費を計上してまいりたい。」と具体的な回答をしていません。



航空写真などでは「結構進んでいる」ように見える埋め立て、軟弱地盤には手つかず全體の14%しかできていません。

普天間の解決もどこへ

世界一危険と言われている普天間基地問題の解決を「辺野古移転が唯一の解決」と政府がうそぶいている一方で、米軍は滑走路のかさ上げ工事や、兵舎の整備など、立ち退きそうにないのが実態です。

今年3月新基地建設の現場視察に来た米軍幹部が「何のために造っているのか。ドローンの時代には使えない不要な基地だ。」と発言したという情報をキャッチした沖縄国際大の前泊教授は「四半世紀前に計画された新基地が防衛政策上、今も有効なのか再検証が必要」としています。(望月吉春:静岡・沖縄を語る会)

●「静岡・沖縄を語る会」は「本土」の側の責任の重さを痛感しつつ、琉球・沖縄への連帯表明を込め、玉城デニー沖縄県知事への緊急激励メッセージを送りました。(富)

元宮古市議 産経に再度勝訴

県営住宅に入れる基準を超える収入があつたのに入居したと報じた産経新聞のネット記事をめぐり、名誉を傷つけられたとして、石嶺香織・元宮古島市議が産経新聞社に賠償などを求めた訴訟の控訴審判決が8月31日、東京高裁ありました。高裁は、一审・東京地裁判決に続いて「記事は眞実とは認められない」とし、記事の削除と賠償金の支払いを命じました。判決理由に「取材をしていない」とされた産経新聞は何ともさんな企業です。

自衛隊馬毛島基地建設の現状(その1)

和田香穂里（元西之表市議）

初めに・・・自衛隊馬毛島基地に反対する理由

基地は戦争と直結している。戦争に備えて武器を揃え、訓練し、戦争が始まれば基地から出撃していく。戦争は基地を造る段階から、平和に生きる権利や生命財産を奪う。自衛隊馬毛島基地建設が始まった今、命や暮らしを脅かす様々な問題が既に起きている。馬毛島に息づいている多くの生き物たちの命も風前の灯となっている。青臭い理想論と言われても、私は世界中から戦争を無くしたい。戦争に直結する基地も武器も無くしたい。目の前の馬毛島基地に反対することは、反戦・平和の闘いと同じ地平にある。

自衛隊馬毛島基地概要

今年1月12日に本体工事が着工された自衛隊馬毛島基地計画について改めて簡単に説明すると、鹿児島県西之表市（種子島北部）から約12km、周囲約12km、面積8.2km²の無人島馬毛島を、まるごと陸・海・空自衛隊の訓練拠点、後方支援拠点、米軍空母艦載機離着陸訓練(FCLP)の移転先とする計画であり、完成すると主滑走路2450m、横風用滑走路1830m、飛行場関連施設、港湾施設、火薬庫も備えた、日本有数の自衛隊基地となる。それは馬毛島のシンボル岳之腰を削り、マグロを追いやる、漁場を潰し、馬毛島の生態系を壊滅させる大規模な自然破壊を伴う計画でもある。

訓練拠点としては、陸海空自衛隊が年間130日使用し、戦闘機、輸送ヘリ、エアクッション艇など併せて12種類、F35Bやオスプレイ、水陸機動団の訓練もあり、飛行回数は2万3千回超に及ぶ。

後方支援拠点として防衛省は当初「大規模災害時」を強調したが、実態は武器・弾薬・人員・物資などを集積し前線へ展開する兵站拠点であり、いま盛んに煽り立てられている近隣国との「緊張関係」に火が着いた時（一体誰が火を着けるというのか？）、琉球弧の島々での戦闘を「後方支援」することになる。また「集団的

自衛権」の行使として「同盟国」米軍の戦闘の「後方支援」も担わされるだろう。

そして米軍 FCLP の恒久的施設として現在の硫黄島から訓練を移転するという。米国からの再三の要求に屈し、まっさらな土地に基地を作つて提供するのかと、地元が最も強く反対してきた点でもある。既に米軍空母艦載機（戦闘機）は厚木から岩国へ移駐しているが、厚木基地での度重なる訴訟で「耐え難い騒音」とされた戦闘機のタッチアンドゴーが、日中のみならず深夜から明け方3時まで繰り返される。年間約20日、飛行回数5千回超に及ぶと説明されている。



種子島も併せた基地化は

「南西シフト」の一環

自衛隊馬毛島基地は馬毛島の中だけでは完結しない。西之表市内には隊員の宿舎（市有地を売却して提供）が、中種子町には宿舎、管理

事務所、練成訓練施設、物流倉庫が、南種子町には宿舎、車両整備工場・車庫、自衛隊ヘリポートが作られ、隊員が「通勤」するために各市町の港も整備されるという、まさに種子島と一体の基地計画なのである。

それらの背景にあるのは米国が中国の太平洋進出を阻止するための、いわゆる「南西シフト」であり、米軍の戦略に従って、防衛力の増強を着々と進める自公政権の下、琉球弧の島々では自衛隊基地の拡大やミサイル配備が進められ、「敵基地攻撃能力」が押し付けられている。馬毛島はそれらの島々で展開される戦闘のための訓練と後方支援すなわち戦争を支える「継戦能力」を担わされるのだ。

「市の活用計画の方向ではないことに残念な思いがある。後戻りできるならそうありたい」

「私の理想は変わっていない。島全体が大きな漁礁でもあり、工事が進み、島民の財産が失われた感じだ」と、8月25日に馬毛島を視察した八板俊輔西之表市長は語った。自ら馬毛島の市有地を防衛省に売り飛ばし、工事着工の先鞭を付けながら「行政手続き」だとうそぶくその口で、一体何を言うのかと、怒りで身が震える思いだ。市長はいまだに賛否を明らかにしないまま、再編交付金を受け取り、事実上基地建設を容認している形だ。馬毛島基地建設に翻弄される地元の状況を報告したい。

異例で異常な突貫工事、膨らむ工事費

馬毛島基地建設工事は、早期に滑走路など飛行場施設を整備し、2025年度には米軍FCLPの運用を開始するとして、通常8年はかかると言われる工事を4年での完成を目指すという。そのための費用は天井知らずで、本格的な予算計上2年目で既に7000億円を超え、その実態は重なる計画変更による入札を経ない随意契約や、国会審議を通さない米軍再編関連予算からの流用も多く、不透明さが際立っている。豪雨災害の復旧や物価高騰の影響緩和などが進まない中、防衛費だけは別格という税金の使われ方を見過ごしてはならない。

押し寄せる建設作業員や関連企業

建設作業員を中心とした工事関係者は、来年2月のピーク時には馬毛島に4000人、種子島に



◆作業員たちの宿舎

2000人計6000人に上るとされ、既に6/5時点で1000人を超えている。ホテル、旅館、民宿、などの宿泊施設は常に満室で、レンタカーも大幅に不足し、観光客や帰省客は予約が取れない状況が続いている。

また長期滞在する作業員らの生活拠点として、アパートや宿舎の新設、既存の建物の改築が急ピッチで進み、コンテナハウスが林立し、市内の家賃相場は高騰して住宅不足が深刻化している。それまで2~3万円台の家賃を数倍に引き上げられ、「払えないなら出て行ってくれ」と借家を追い出された人もいるといい、住むところの見つからないUターン・Iターン希望者からの行政への相談も増えている。

更に、ゴミ捨てルールを守らない、焼却場はパンク寸前、水不足や排水の問題、作業員同士や地域住民とのトラブル、子ども達への声掛け事案、工事車両激増による交通事故の懸念などなど、島の静かで平穏な暮らしが大きく様変わりしてしまった。

地場産業の混乱と破壊

工事関係労働者の給料は日給2万円と言われ、地元の建設労働者がこぞって馬毛島関連に流れて、地元業者間で作業員の奪い合いや囲い込みと賃金の引き上げが起き、小さな建設業では

対応できず死活問題となっているという。また農作業従事者や林業従事者、農協職員までもが馬毛島関連作業員として従事するようになり、田畠や森林が荒れ、担い手不足が激化し、種子島の林業に深刻な影響を及ぼしている。

漁業を巡っては、海上タクシーとして作業員を馬毛島に送迎したり、工事区域の警戒にあたる漁船には一日7万円が支払われ、軍港建設による漁業制限や漁業権の放棄で漁協が得た22億円の組合員への分配もあって、漁に出る漁業者が激減している。結果、地場の水産物の水揚げは大幅に減り、店頭には地の魚が並ばなくなつた。長年地元の魚を干物やさつま揚げに加工して販売してきた業者が廃業したとも聞く。漁業ばかりではなく、食文化すらも消滅の危機にある。

馬毛島バブル

確かに、工事関係者の増加によって、宿泊業、スーパーやコンビニなどの小売業、ガソリンスタンドなどでは、売り上げを伸ばしているところもある。しかしそれらの多くは島外資本やフランチャイズなどのチェーン店であり、個人経営の商店をますます追いかけていている面がある。

また女性が接待する店も増え、つい先ごろは新しくできた「キャバクラ」が摘発を受けたが、馴染みの店でのんびり楽しんでいた地元客は足が遠のいているとも聞く。

何より工事関係者による収益は、工事関係者がいる間の期間限定であり、工事が終わって数千人が島から引き揚げた後には、一体何が残るというのか？

再編交付金による行政バブル

…アメとムチ？麻薬入り毒饅頭？

米軍再編交付金は、反対している自治体には交付されない。逆に言えば再編交付金を受け取ることとは、その事業を受け入れることだ。金をちらつかせて有無を言わせないア

メとムチの手法に抗って煮え湯を飲まされた自治体として、岩国などの例があるがここでは詳述しない。

米軍 FCLP 移転を伴う馬毛島基地建設に関しては、23年度、西之表市20億7200万、中種子町5億1800万、南種子町2億4200万の再編交付金が交付された。西之表市では22年度の交付金で基金を作り、23年度から小中学校の給食無償化を始めた他47事業を予算計上している。しかし、6月議会の時点で交付が決定された事業は1つか2つだ。その後いくつかの事業が交付決定されたというが、親しい市職員の話では、交付金というものはそれほど簡単に下りてくるわけではなく、（再編交付金は）何でも使える使い勝手の良い財源だと吹聴してきた市長や賛成派議員らを厳しく批判している。実際に、基地を抱える他自治体では、使い道に苦慮した挙句に購入した物品が、一度も使われること無く何年も倉庫に眠っている例もある。行財政改革で縮小された人員と予算でやりくりしてきた西之表市の体制で、そんなに多くの事業を策定し、執行していくのかという不安もある。

最も憂慮するのは、基地関連交付金が恒常に財源となれば、基地に依存したまちづくりしかできなくなることだ。「基地経済に頼った地域の発展は、基地機能の強化の度合いに比例し、同時に、他の資源利用を妨げることから、一度踏み入れば引き返せなくなる恐れがあります」と、3年前に語った八板市長は、麻薬入り毒饅頭の恐ろしさを知っていたはずなのに…今、どう考えているのだろうか。

賛成派誘致派が喧伝してきた基地建設による地域活性化の実態は、巨大公共事業に群がる大企業と、その恩恵に預かれる一部の地元業者の金儲けのための一時的なバブルに過ぎないことが、既に官民ともに露呈し始めて、積極的誘致派からさえ「こんなはずじゃなかった」の声が上がっている。

和田さんは訴えます。「島外県外の皆さんには、自衛隊馬毛島基地建設と米軍 FCLP 移転に反対する声を全国から上げて、世論を作っていただきたい。」と。次回をご期待ください。（大）

メディアが伝えない沖縄の島々の現実に驚く人たち —富士戦争展で「沖縄のいま写真展」の展示をみたら…

山崎ひろみ(静岡・沖縄を語る会共同代表)

平和のための富士戦争展開催

8月に開かれた「平和のための富士戦争展」。市内外から6日間で1339人が来場。メインテーマは、昨年と同じ「戦争やめて！平和な世界を」。今回の写真展は「沖縄の今を知る写真展」と題して琉球弧の島々の写真を展示しました。さらに沖縄コーナーでは「また『沖縄が戦場になる』って本当？」と題して78年前の「ありったけの地獄を集めた」沖縄戦を紹介。沖縄県公文書館所蔵の、戦場に放り出された幼い子どもたちや傷ついた子どもたちの写真も展示。戦争になれば、戦場になればこうなると訴え、来場した小さな子どもたちもじっと写真をみつめてくれました。



富士戦争展の会場風景



「沖縄の今を知る写真展」の展示



沖縄戦の展示を見る人々

会場では「核兵器のない平和で公正な世界へ」「今こそ、日本国憲法の『平和主義』を守り抜こう！」「戦争について考えてみよう(動画コーナー)」「特高警察による反戦平和・自由の弾圧—富士地域の弾圧事件を見る」「銃後と兵事係のしごと」「いつも笑顔で(子どもコーナー)」などの各コーナーがあり、それぞれ実行委員が説明をしていました。今年も、核のコーナーで広島の高校生たちが、被爆者から体験を聞いて描いた絵画や、地域の戦争の傷跡を調査研究して展示した「特高警察による弾圧」のコーナーが注目され、身近な地域で戦時に起きた自由への弾圧に多くの人々が関心を示していました。

沖縄の島々の基地増設に驚きの声

注目すべき反響があったのが、写真展の琉球弧の島々の「今」の写真でした。写真は、与那国、石垣、宮古、沖縄島、奄美、馬毛島(種子島)の各島々ごとに、急速に進む自衛隊基地の建設や島の人々の姿をありのままに捉えたもので、緑豊か



山を切り開いて造られた石垣島の自衛隊基地（写真展示から）

な島々の山肌がえぐりとられ、新しい駐屯地や弾薬庫が作られ、軍事訓練が行われているものでした。人々は「あんなになっているなんて知らなかつた」「驚いた」「基地だらけ」などと語っていました。

なぜ人々は、この実情を知らないのか？
それは本州のメディアが沖縄の現実を伝えないからです。琉球弧の島々の現地の人々はミサイルを島に持ち込まれ、弾薬庫も作られて、さらに増設中の島もあり、絵空事ではなく、現実の軍拡に恐怖を感じているのに、どのような問題が起きているのかを本州のメディアはほとんど伝えません。



奄美で声をあげる人々（展示写真）



沖縄の写真展示に見入る人たち

危機を煽って、軍拡を容認させる方向に誘導するなどあってはならないことです。実態を把握し、戦争になつたら、ではなく戦争にしないための平和外交や緊張緩和の施策について冷静に考える必要があります。激しい地上戦のあった沖縄だからこそ、人々は「ノーモア沖縄戦、命どう宝の会」などを立ち上げ、全県で二度と戦場にしないと声をあげていることを本州に住む私たちも共通認識を持たなければならないと痛感します。メディアはもっと真実の報道を！

沖縄ツアーア、変貌する沖縄島・辺野古へ

— 慰霊の日の人々の祈りと厳しい規制の異様さに衝撃

沖縄の今を知りたい仲間と

語る会のツアーとして仲間5人で慰霊の日近く沖縄島を訪れました。

初日の訪問先は普天間基地を見下ろす沖縄戦の激戦地嘉数高台、丸木位里・俊夫妻の沖縄戦の図を展示する佐喜眞美術館。普天間基地には数機のオスプレイが駐機し、日常の中に欠陥機オスプレイが同居する光景はすでに常態化。普天間基地閉鎖も辺野古新基地建設断念も、いまだ解決に至らないばかりか、沖縄島の自衛隊規模も拡大し、琉球弧の島々は戦争の準備段階にあります。



宜野湾市の嘉数高台から見える普天間基地

普天間基地近くの佐喜眞美術館は、『沖縄戦の図』全14部展の特別企画開催中。慰霊の日近くに、丸木夫妻の渾身の大作と対峙できる絶好の機会に恵まれました。集団自決(集団死)を描いた「沖縄戦の図」の前で佐喜眞道夫館長の解説を聴講、普天間基地にせり出すように作ったこの美術館の成り立ちの意味、丸木夫妻がなぜ沖縄戦の図を描いたのかをかみ締めて聞き入るひと時でした。

変貌する辺野古、人々の鬱い

2日目は辺野古へ。翌日の慰霊の日のため土砂搬入はなく、日頃のゲート前の非暴力の座り



座り込み 7000 日を超える「浜のテント」

込み抗議行動や本部塩川港での牛歩行動などを体験することはできなかった。

辺野古の海に面した通称「浜のテント」は、常駐スタッフではなく有志が当番での対応。この日も三重県の学生たち20数人が訪れ、辺野古の状況説明に聞き入る姿がありました。コロナ禍で訪れる人もカンパも減りましたが、700日を超えるこの座り込みテントは抗議行動の原点、人々は諦めることなく、全国に訴え続けています。

埋め立て工事は、辺野古側の埋め立て工事92%が7月に終了、軟弱地盤のある大浦湾側は手つかずで、2018年からの土砂投入は5年後の現在でもまだ全体の14%ほどの進捗。さらに米軍の辺野古弾薬庫の改築工事など新たな工事のため、周辺の林が広範囲で伐採されていました。

沖縄戦 78 年後の慰霊の日

3日目。「慰霊の日」に摩文仁の平和祈念公園へ。多くの人々が花や水を供え祈りを捧げていました。沖縄全戦没者追悼式で、玉城知事は力強く平和宣言をし、二度と沖縄を戦場にしてはならないとの決意を述べました。しかし、島々へ



約 24 万人の犠牲者名が刻銘された平和の礎。
の自衛隊ミサイル基地配備についての具体的
言及はありませんでした。78 年前の沖縄戦の教

訓は「軍隊は住民を守らない」。「この場所を再び戦場にしてはならない」。

この日はひめゆり平和祈念資料館、平和祈念資料館、魂魄の塔、国際反戦集会と巡りました。最終日は、対馬丸記念館、不屈館を見学し、帰途につきました。（概要・山崎ひろみ）



魂魄の塔

沖縄視察を終えて

堀川文夫（富士市在住）

今回の沖縄視察で、語る会の皆さんには大変お世話になり、ありがとうございました。初めての沖縄、「基地の島」という漠然とした印象だったが、実際に見て、車で走って、「島が基地」だと実感した。どこまでも続く金網に囲まれたその先に、道路からは見えない米軍基地があると。辺野古の新基地建設現場、金網と有刺鉄線で仕切られた向こう側に、数人の警備員が目を光らせ、「近づくな」と睨みをきかせている。ふと同じような光景を思い出した。東電福島第一原発敷地だ。1.5 km先の監視棟からセンサーで近く者を寄せつけなかった双葉町細谷海岸南側、7、8号機建設予定地の境界に。どちらも進入を許さない秘密の危険な場所という点で通じるところがあるように思えた。

糸満市摩文仁の平和祈念公園では、「沖縄全戦没者追悼式」に参列した。岸田首相の挨拶の大部分が、沖縄への経済支援を進め、軍備を増強して平和を守る、とのことに白々しさを感じたのは私だけではないと思いたい。その後「魂魄の塔」近くでの国際反戦集会に参加して、思いを同じくする人々に会ってほっとした。

ひめゆり平和祈念資料館、対馬丸記念館、佐喜眞美術館、不屈館などに行つたが、そのどこでも亡くなった多くの方々の思念がどっと私の中に入り込んで胸が苦しかった。

改めて、この地が戦場にならないよう、日本が過ちを繰り返さぬよう、自分が出来る努力を続けようと心に誓った旅だった。



「本当の沖縄」とは

堀川貴子（富士市在住）

70歳を目前にしての初めての沖縄の旅。3泊4日という短い凝縮されたスケジュール。行く先々どの場所も、それぞれが深くそして重く心に響くものだった。帰省し、何人の友人に沖縄行きを話すと、「ソーキそば食べた?」「もずくの天ぷら美味しかったでしょ」とか「水族館すごいでしょ、泳いできたの?」「国際通りで何買い物した?」…誰ひとり、「ひめゆりの塔」や「平和祈念資料館」や摩文仁の「平和の礎」や「対馬丸記念館」のことを聞いてくる人はいなかった。興味も関心もないとのことだった。

それは、2011年3月11日前の私と同じだった。夫と結婚していなかったら、原発近くの町に住んでいなかったら、私は原発に対して何も知ろうとしなかったし、知りたいとも思わなかった。あの事故で、すべてを突然奪われて初めて無知を痛感した。知らないということ、知ろうとしないということ、それはただの傍観者よりもたちが悪いと気づかされた。今回の沖縄の旅で、戦争は終わっていないと強く感じ、再び戦場にされてしまうかもという恐怖を覚えた。と同時に、亡くなられた方々の無念や悲しみが私を襲った。

多くの人に現状を知ってもらう難しさ。今、私は何をしたらいいのだろう。

♪♪♪♪8・19中川五郎さんライブ 五郎さん、熱唱♪♪♪♪



8月19日 静岡市リアンにおいて、静岡・沖縄を語る会の共催による、フォーク歌手・中川五郎さんのライブが開催され、約50名の参加がありました。今回のライブは、1923年9月の関東大震災100

●世界の差別をなくしていく。

年にあたり、中川五郎さんの歌がきっかけとなつた、「福田村事件」の映画が公開されてのライブ公演でした。五郎さんの歌は、この「福田村事件」が大作で圧巻でしたが、ウクライナ反戦・言語差別の歌や、東日本大震災後の元警察官の歌など、時代を詠んでいたり、彼の反戦平和や、反差別の信念が語られたりしました。最後はボブディランの歌で、アンコールもできないほどの熱唱でした。

五郎さんの歌を聞いて、日本人がやってきた、朝鮮や沖縄植民地差別も含め、負の歴史、遺産に目を背けてきたことが、彼の歌の根底にある。と痛感しました。映画「福田村事件」(森達也監督)はお薦めです。
(佐野)

【編集後記】「関東大震災100年」との関連で琉球・沖縄の歴史を調べていたら琉球弧の詩人・高良勉さんが「琉球人への差別や虐殺は研究少なく山之口蘋や比嘉春潮は詳しく体験記す」(9月2日・沖縄タイムス)という寄稿記事をみつけた。この間、朝鮮や中国の人々に対する虐殺や差別の問題には目を向けていたが琉球人虐殺や差別は素通りしてしまうこともあった。勿論、「人類館事件」など明治以降の日本・日本人による差別がまかり通っていたことが腹立たしかった。高良さんは「曰米軍事植民地体制での構造的沖縄差別は強化されている」と主張する。高江での「土人」発言などヘイトスピーチが続いている。心して学んでいきたい。そして、司法が行政・軍事に取り込まれ、地方自治が蔑ろにされるこの国で一歩でも前へ進みたいと思う。(大)